

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第7回)

イギリスの庭園

イギリスを旅すると、一般客にも公開されている貴族の館が各地に散見される。どこも蒐集美術品や調度品を含めた屋敷そのものだけでなく、広大な庭園が壮観である。パンフレットを見ると、たいてい「この庭園は17××年に“Capability Brown”によって設計され…」という説明が出てくる。18世紀のイギリスの風景式庭園の設計士、ラーンスロット・ブラウンのことだ。それまでは並木がシンメトリックに規則的に立っていたり、階段状に泉が連なっていたりするなど幾何学的に均整のとれたフランス式の庭園が主流だったが、自然の風景のような景観にするという18世紀末から流行した庭園スタイルを決定づけた第一人者がこのブラウンである。設計を請け負う際、「この庭にはこういう可能性(=Capability)がある」というのが口癖で、それがあだ名となったという。

自然の風景というのは、例えば、屋敷の窓から庭園を見て、生け垣が見えたとしたらそれは人工的に作られたものだから不自然だということになる。だが、生け垣がないと放牧した羊が勝手に出入りしてしまう。そこで生け垣に代わって多用されたのが「隠れ垣(ha-ha)」と呼ばれるものだ。境界を作りたいところに堀のような溝を作り、その表面も同じ草で覆われているため、遠くから眺めると、人工的な境界線が見えず自然な風景に見える、というわけだ。こうすることで、景観を損

なわずに家畜の出入りも制御できた。

ところが、19世紀になると「自然」というものの考え方が変わってきた。自然とは本来もっと荒々しいもので、自然に曝された景色とは、もっとワイルドで、雑然とした、不規則なもののはずだ——サルヴァトル・ローザの絵のような、ゴシック小説の舞台となる風景のような。ブラウンの後に続く設計士たちは、こうした「自然」の考えを庭園設計に取り入れたが、このようなスタイルを「ピクチャレスク」(絵のような／絵になる)スタイルと言う。時間の経過という自然の力を表わすために、庭に廃墟を建てた(廃墟を新築した!)例すらある。

トム・ストッパードの戯曲『アルカディア』(1993年)は、この19世紀の「自然の不規則性」の概念と現代のカオス理論やエントロピーの法則を結び付け、コンピュータのなかった19世紀初頭に「自然を表わす数式」を導きだす天才少女の話と、そんなことできたはずがない、と現代の立場から過去の出来事を推察する学者たち話を交互に見せる物語である。最終場、交互に繰り広げられた前場までの小道具がすべて机の上で混じり合って混沌状態を生み出している。自然の成り行きでエントロピー値(不規則度値)が高くなったという洒落なのだが、なんともオシャレな洒落だ。